

17

寛政六年五月カピタンが桂川甫周に與へた 人の首の模型について

緒方 富雄

(東京帝國大學醫學部病理學教室血清學部)

I

寛政六年甲寅(1794)五月四日と五日に、大槻玄澤等は、桂川甫周の世話で、そのころ江戸へ参府のため来てゐたカピタンと長崎屋で對話する機會を持つた。その時の記録を、大槻玄澤が『甲寅來貢内客對話』のなかに書きのこしてゐる。それによると、五月四日に栗本瑞見、桂川甫周、澁江長伯、大槻玄澤がカピタン等と對話をしてゐる。カピタンは G. Henmij, 附添の醫師は A. J. B. Keller, 通譯は小通詞今村金兵衛である。

この時の對話の記録のなかに、次の文¹⁾がある。

『加比丹^{ロウサイクノヘトスクビ}蠟人首、側面ヲ解キカケタルモノヲ桂公ニ贈ル。諸皮ヲ剝テ筋脉見ヨリ。且耳下^{キリール}巖里兒、唾管等ヲ見ワス。形狀色澤宛然トシテ眞ニ逼ル。其諸筋ノ名號等醫生ケルレル羅旬語ニテ暗記シ、一々指示ス。頸ノキリ口ヨリ氣管、食道、及大絡^{キリール}二道見ユ。側面ノ顔色、眼口半ハ開キ、其色澤ノ死相甚タ冷然、人ヲシテ^{ハシク}眩視セシム。吾等ノ如キ、已ニ屢々刑屍ヲ解剖シ其眞ヲ觀タルモノハ殊ニ益々感ノ不巳ナリ。奇巧精妙、今ニ始メ事ナガラ、驚嘆スルニ堪タリ。拂郎察國都把里斯^{パトリス}ト云處ニテ、婦人ノ造ル所ト云フ。全身備リアリトヤ。尙皆購リ求テ見シ事ヲ希フモノナリ。醫ニ志アルモノ此物ヲ見レハ、直ニ解剖セシメ熟識スルニ足レリ。醫家講習ノ爲ニ設ケシモノト見ヘタリ。』

文中『桂公』とあるのは、この對話を世話した桂川甫周のことである。『耳下巖里兒』とは、耳下腺、『大絡』とは大きな血管(靜脈)である。又『醫生ケルレル』とあるのは、上述の Keller である。

1) 句讀點は私がつけたものである。



圖 1

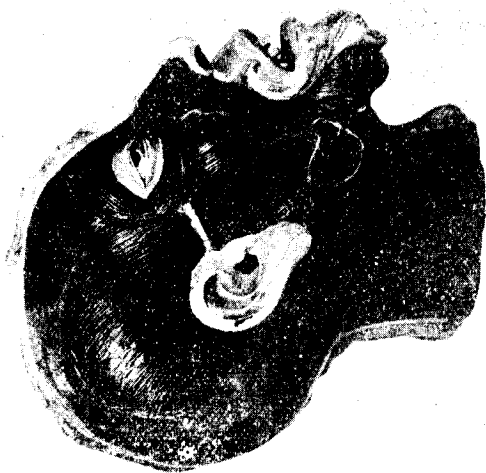


圖 2

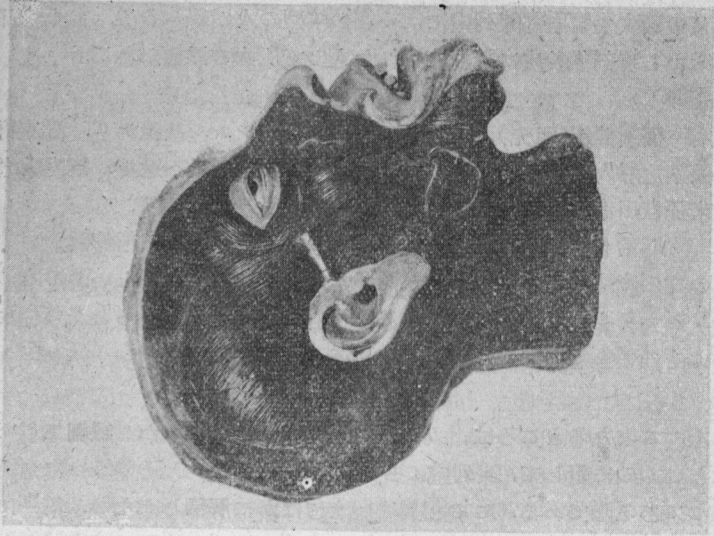


圖 2



圖 1

II

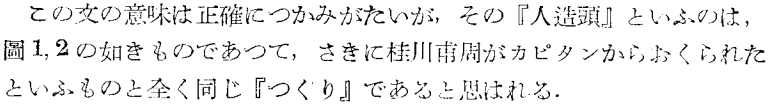
東京帝國大學醫學部陳列室に、一個の模型の人の首がある。古く織田信徳氏から解剖學教室に譲り渡されたもので、次の添文がある。

『人造頭』

右ハ醫師桂川(祖先)西洋醫學ヲ内國ニ行ハシムル基祖ナリ。當時蘭醫某之婦人此事ヲ聞キ喜デ、自ラ是ヲ作り、同氏ヘ送ル。後同氏之末孫桂川甫周氏ヨリ明治八・九年頃譲リ受ルモノナリ。

明治廿二年一月

織田信徳記』

この文の意味は正確につかみがたいが、その『人造頭』といふのは、 圖 1, 2 の如きものであつて、さきに桂川甫周がカピタンからおくられたといふものと全く同じ『つくり』であると思はれる。

III

ただ、ことなるところは、カピタンがくれたといふのが『蠟細工』であるといふのに對して、陳列室にあるのは、『木細工』で、そのうへに塗料がぬつてある點である。この相異はいまにはかに解釋しがたい。第一には、大槻玄澤が蠟細工と見たのが、實はさうでなくて木細工であつたかも知れないし、第二には、甫周のもらつたものを、あとで木細工で模造したのかも知れないとも考へられる。それを解決するためには、まづ、現存のものが、日本製であるか、外國製であるかを決する必要がある。おそらく日本での複製品であらうが、斷定はひかへる。

IV

それにしても、カピタンが甫周におくつた『首の模型』が、こんなつくりのものであつたといふことは斷言してもよいと思ふ。織田氏の文中の『當時蘭醫某之婦人此事ヲ聞キ喜デ自ラ是ヲ作り、同氏ヘ送ル』といふのが、玄澤が書きしるした『拂郎察國都把里斯托云處ニテ、婦人ノ造ル所ト云フ』とはなはだ似てゐるところがみのがしがたい。恐らく織田氏のあやまりではなからうか？

ここではただ、桂川甫周がカピタンからもらつたといふ首の模型と、全く同じ構造のものが東京帝國大學醫學部陳列室に現存してゐることを指摘するにとどめたい。

〔詳細は別に發表する〕

(受附：昭和16年11月20日)